
「華化」・グローバル化と文化の自発的な動き

——今日における中国少数民族文化の現状と動向——

周 星

〈愛知大学〉

21世紀の最初のいくつかの年に入った頃、中国の文化層と知識層にとって、最も重要な出来事は、各民族の民間における伝承文化を無形文化財として「救い出す」、または「保護」することである。数多くの学者や有名人の呼びかけによって、政府も迅速に反応を示した。今のところ、国家プロジェクトに関係する財政予算は、すでに積極的に批准に向かって動いているところである。文化・知識層と政府の間に、この問題を巡って共感を有している。このような共感は、中国文化の「現代化」が初歩的発展を遂げ、「グローバル化」が絶えずに浸透していくなか、直面する境遇および引き出された焦燥によるものであり、実に興味深いものである。

改革開放以降、「文化を巡る討論」において、「現代化」という理論が常に用いられ、中国社会の文化の変遷過程を分析してきた。近年、またも「ポスト現代主義」の文化批判が現れた。そういった理論は多くの面において、分岐が見られたけれど、二つの出発点は極めて類似している。それは、一、「西欧文化」に対し、「中国文化」の内部が同質で固まっているという見方に傾いている。二、「中国文化」を文化の「現代化」の対象あるいはその反対だと思なす傾向がある。その結果、あたかも中国文化も自然的に「前現代」あるいは「伝統」の属性を帯びることになったように見えた。

本文は、現代化の文化理論とポスト現代主義の文化批判の具体的な是か否かを詳しく討論するつもりはない。中国少数民族の文化的境遇および動向から中国文化に含まれている複雑性および文化に関する問題討論の局限性を指摘することを試みたい。

1. 「華化」：「漢化」を改めて解釈

「少数民族文化」の視点から見れば、中国文化には豊かで多様かつ複雑な内容があることは明らかである。それを単純に同質の塊と理解してしまうことは難しい。しかも、現在各少数民族存続の生活方式として、少数民族文化を文化の「現代化」の対象にしていいかということも大いに疑問がある。少数民族文化の問題を議論する際、我々は異なった描写言語または分析の概念を用いる必要があるかもしれない。例えば、国内民族関係の漢文献のなか、「漢化」および関係のある概念に関して、深く検討し、重視に値する。

「漢化」というのは、各少数民族が長期間にわたって漢民族集団と互いに影響するなか、比較的によく漢文化を受け入れた、場合によって民族のアイデンティティを失い、最終的

に漢民族に「同化」したというような現象、過程および結果のことである。「同化」の過程は文化間の相互受容のときと、暴力と強制を伴うときがある。よって、「漢化」は多くの場面において消極的な意味合いを持っている。

はっきり分かったのは、「漢化」という概念を用いて国内の各民族間の文化関係事実と状況を描写、分析するさい、多くの問題がある。まず、費孝通教授が述べた「多元一体」論の如く、歴史上、漢民族と少数民族の文化相互影響関係には、早くも「貴方の中に我あり」、「私の中に貴方あり」といった局面が形成されている。「漢化」のみならず、「少数民族化」も見られる。次は、現在、少数民族の人口が継続して増加に転じた事実は、「優遇政策」の影響はもちろんのことだが、一方では「漢化」説にも疑問を投げかけた。第三、国内の民族関係に複雑な文化の相互影響の関係も含まれている。このような関係が単純に漢民族と少数民族の間にしかないような理解は、問題を単純化するだけである。実際は、異っている民族地域では、少数民族の間に、文化の相互影響はむしろもっと重要である。そのほか、いくつかの少数民族が主として文化のパターンを形成させ、漢民族の集団はこの多元的「地域民族社会」の中の一つにすぎないケースもしばしばである。

だといっても、「漢化」という概念は選択や分析を経て依然として一定の意義があり、それを用いて少なくとも国内多民族文化の間の相互影響の進展方向を描写することができよう。剥離の中で最も重要なのは、ある日本民族学者が指摘したように、つまり、「漢民族化」と「漢化」を区別することである。前者は同じ民族の帰属意識に変化が生じたときに用いられる、後者は文化の相互影響のとき、とりわけ漢文化が多くの地域に受け入れられた際に使う。そうすると、我々は一つのことを気付くはずだ、すなわち、「漢化」は、今の中国の各少数民族の地域でとまらずに進行しているが、必ずしも「漢民族化」という結果まで導かれるとは限らない。言い換えれば、少数民族は、一方では、漢文化を多く吸収し、もう一方では、独自の民族意識と帰属意識を依然として保持し続けている。

半世紀近く、少数民族文化の中国文化への貢献は人々に認めさせつつある。少数民族が漢文化を積極的に取り入れると同時に、自らの民族文化と他の民族文化との受容とともに、中国全体文化の創造的活動に加わったのである。よって、「中国文化」はすでに漢民族文化ではなく、各少数民族の文化および民族間における互いに影響しあって作り出された「民族間の共同文化」をも含まれるようになった。ある意味では、剥離を経てからの「漢化」という概念は、むしろ「華化」と呼んだ方が適当であろう。我々は、中国文化が大量の少数民族の文化における貢献を吸収し、並びに多くの民族間の共同文化をカバーしてこそ、「世界的普遍性」を持たせたと言えよう。

もちろん、「漢化」という概念は依然として中国少数民族文化がずっと直面している現実味のある状況であることを否認できない。改革開放政策の推進を伴い、国家の現代化建設が推し進められ、東南沿海地域はその先頭を率いて展開した。それがゆえに、地域の間、民族間の発展に均衡が欠ける問題に関しては、少数民族文化に関する討論のなか、常に文化の「現代化」に対立する場所に置かれている。少数民族文化は都市部の文化、東南

沿海部地域および漢民族の文化と比較するとき、「ポスト現代主義」あるいは「伝統」といったようなシールを貼られたことも免れかねる。

ポスト現代主義に対する文化批判は文化の多様性と文化の相対主義の価値観を強調し、文化消費主義に反対するほか、自然調和と環境保全における「伝統」文化要素を賛美するなど、筋が通っているように見えたが、我々が一旦少数民族地域に深く入り込めば、実際問題として、現地の人々が最も基本かつ切迫に求めているのは、やはり「現代化」の進展ということである。

2. 「グローバル化」が何をもたらしたか

改革開放以来、国際社会への「軌道乗せ」の試みは絶えずにさまざまな努力を重ねている。WTOの加盟とオリンピックの開催決定など、中国では、「グローバル化」の進展は、受身の場合もあれば、積極的に求める事実もある。グローバル化は多くの中国の経済変化とチャンスをもたらすと共に、中国社会の文化、社会心理、国民の日常生活の各側面に及ぶ衝撃や影響をももたらした。グローバル化時代の到来という事実は「中国文化」より「世界的普遍性」を持つ勢いの強い「国際性」のある文化のほうをさらにもたらしたようである。19世紀末期以降、中国はすでにこのような衝撃と混迷に直面しはじめた。しかし、20世紀末期とこれから開く21世紀において、問題は新たな背景の元でさらに深い意味を具えている。一方では、中国経済の高速成長により、前の時代にはない自信を促成した。もう一方では、現実に存在する混乱とさまざまな社会の矛盾点が深刻さを増し、解決のすべが見当たらない。いつも文化に優越感を覚える中国の知識人と「文化人」とにとって、グローバル化の進展に従って一連の問題を引き起こした。その中に、いかに中国文化を定位するかが最も根本的であり、すなわち、グローバル化の勢いの中、どうやって中国文化の自主性を保つかということである。それは中国人が中国文化の価値観、倫理感と日常の常識をもって継続的に世界文化発展の潮流に積極的に参加できるかどうかにかかっている。ここで、忘れてはいけないのは、我々は「中国文化」と「中国人」を含んでの認可も同時に多重構造を具えていることである。

確かに、我々に必要なのは、グローバル化の進展におけるいわゆる「世界的普遍性」の背後には、世界の資本主義経済体制という特殊の価値観がベースになっていることを常に提示する人である。ところが、我々は依然としてこのような進展が回避できない現状を無視するわけにはいかない。それに、中国のような多民族国家の内部から起こりうるもっと複雑な文化の相互受容の現象も見てみぬふりにすることができまい。

今日では、ある少数民族の社会は現在すでに直接にさまざまな源をもつ国際文化と接触し、影響をうけることができた。「世界」の文化を学び、理解または受け入れるとき、「漢化」あるいは「華化」の段階を経ずに行うケースが際立っている。当然ながら、この具体的な様子と経路は非常に複雑である。延辺朝鮮族が韓国文化の影響を、または雲南省のタイ族がタイの文化の影響を受けるような場合もあれば、麗江納西族のように、いきなり

「世界文化遺産」の下で納西文化を再定義し、さらに組み立てなおそうとするような場合もある。そのほかに、雲南省迪慶チベット自治区の「シャングリラ」を再発見のシナリオのような、国際あるいは西側社会のロマンチックの思いの当たりで自己定義する場合もあれば、中国のイスラム世界が絶えずにユーラシア、中近東地域から商業資源と宗教思想を汲み取る場合もある。そのなかに、西洋思想に反対し、グローバル化を拒む傾向も排除できない。中国では、現代化とグローバル化の影響は、すでに少数民族における「辺境」という属性を消しつつある。

むろん、国家がつかんでいるパイプと漢民族が主体となる東南沿海地域の仲介を通して、少数民族社会は少しずつ中国現代化進展とグローバル化の背景の下で地域の仕事分担の秩序及び文化関係のパターンに挟まれつつある。それは目前で観察できる基本的な態勢である。この過程に係わる討論のなかで、常に文化現代化の理論と「現代性」に関係する描写を借用し、漢民族（本当は部分的に政府が主導しての国家意識形態）と少数民族間の文化関係を描写、分析する者がいる。それは「西洋」の概念体系を用いて国内の各民族間の文化関係の複雑な状況を解釈することである。また、「ポスト現代主義」の言語批判を借用し、少数民族文化に特有の「ポスト現代」の価値を賛美あるいは発見に努める者もいる。前者は場合によって漢民族中心主義の色彩を有すると人々にしばしば批判される。後者は場合によって「前現代」の立場に立っていながらも「ポスト現代」の幻想を語ると時々非難される。

「グローバル化」の勢いから「漢化」・「華化」のメカニズムまで、さらに少数民族文化の具体的な存続状況を眺めていくと、段階的に登っていく構造になっていることが分かった。少数民族文化はこのような過程あるいは前進の中で特殊な境遇と問題に直面するのである。

3. 「文化自覚」の傾向

社会を鋭く察知する社会学者の費孝通教授は近年何回も「文化自覚」というテーマを提起した。彼の解釈によれば、いわゆる文化自覚は、ある文化に生きる人がこの文化に対してよく知り尽くしていることをさす。つまり文化の来歴、形成の過程、特色と発展の傾向などのことである。費孝通は次のように指摘した。文化自覚があつて、自らの文化に対してその由来をよく知っておけば、文化転換時の自主的能力を強めることができ、新たな環境に適応し、それに、新時代の文化選択の自主的地位を手に入れることができる。ここで、文化自覚は多くの異文化と接することを理解することが基礎となっており、自分の文化を認識することを前提としている。グローバル化が避けられないとき、または中国現代化の進展が初歩的に進んでいってから中国文化の自主性を求めるのに努力を払うことは、今の中国文化と知識層の主流な声である。「文化自覚」というのはこのような声のなかで代表的なものである。ほかに多くの提案もあるが、観点もそれぞれ枝分かれしていて意義が違う。しかしながら、それらの語句の背後の、原動力となるメカニズムは皆一緒である。話

の方向も極めて接近している。

では、少数民族の文化の状況はどのようになっているのだろうか。少数民族は長期間に「華化」の繰り返しの構造関係の中でありながら、各自の文化のアイデンティティと民族の帰属意識を頑固に保っている。少数民族はただ今グローバル化の波と国内の現代化の進展という二重の刺激と衝撃にさらされている。我々はこのような文化の動きに真剣に注目することに値する。

グローバル化と現代化の進展によってもたらされた圧力に対抗するとき、少数民族の文化動向は複雑で多様な趨勢を呈している。もっとも見られる現象は、少数民族出身の幹部あるいはエリートが、直接「現代化」の文化理論を借用し、自分の民族の内部文化と社会変革を求めることである。このような傾向の基本的特徴は、「貧乏」と「先進」あるいは「伝統」と「現代」の間の格差を強く意識し、現代化発展のチャンスをより多く獲得することを求め、とくに、国家現代化建設に加わっていくことにおいて平等の待遇を要求することである。このような傾向において、「民族性」に関する自己反省の内容（1980年代の文化討論における「国民性」に対する反省運動に似ている）がある。場合によって直接に「漢化」こそ自らの文化の行方だと出張する意見もある。もう一方では、反対の傾向があると言えよう。つまり多少「ポスト現代」の色彩を持ちながら、少数民族文化の中の「伝統」、「自然」と「緑」などの環境保全の要素を極端に強調し、これこそ「現代化」を超える価値であると考えているのである。

すなわち、少数民族の文化動向の中、現代化への憧れもあれば、「現代性」への批判もある。特に指摘しておきたいのは、状況と雰囲気の変化によって、少なくない人は常に上記の二つの立場の間で行ったり来たりする。実際、このようなことは少数民族知識人の独特な状況と常にある文化選択のジレンマを深く反映している。筆者からみれば、どんな立場あるいは傾向にせよ、どれも少数民族が自分の文化の独自性を保持しよう、または「文化自覚」を求めようとする現れである。

観光業と少数民族文化との関係を例として考えれば、少数民族の文化動向は通常、次のような反応があると見られる。①自らの文化を観光資源として開発できたことに自慢を覚え、それを強くアピールする。よって自分の民族文化や歴史の「絶対的」価値を拡大して強調する場合はしばしばある。世界の中心都市の観光客に見られることは常に少数民族文化あるいは地域文化が「世界」的価値を具える理論的根拠とされている。②もしも、観光客という集団が「グローバル化」と「現代化」を背負う主体あるいは体現者であれば、少数民族地区のすべての観光ポイントと景観は、できるだけ観光客の文化的消費のさまざまな需給を満足させる現象が出てくる。「グローバル化」という背景を持つ一連の観光業では、「見る」と「見られる」という文化消費の関係のパターンにおいて、好き嫌い、主動か受身にかかわらず、少数民族文化に対する位置付けは西洋あるいは中心都市の「辺境」、「末端」とされ、ロマンチックや好奇心または長閑な消費を満足させるものであるにほかならない。③実際に、操作のゾーンでは、人々はいつも文化を開示できる部分と開示でき

ない部分に分ける。そうすると、文化消費の商品を便利に提供できるし、固有する生活方の基本的安定を容易に維持することができる。しかし、このような努力の結果は文化の断裂と帰属意識の乱れをもたらすおすれがある。④少数民族文化の特性と民族帰属意識の維持を努めると同時に観光業の発展と少数民族の新たな文化の創造と発展にチャンスを与えた。このなかに、人々が文化を改めて定義するケースは常に見られるのであろう。例えば、自らの民族のある部分を「現代」あるいは「ポスト現代」の属性を帯びていると述べるのがそうである。

よって、国内外の「現代化」と「グローバル化」の文化の衝撃のもとで、中国少数民族文化もさまざまな動向を示している。こういった動向を分析することによって、中国社会と中国文化の複雑性を深く理解するのに、大いに助けになろう。

今まで、中国の「現代化」の進展は、依然としてこれから「多民族国家」という国民意識を如何に確立し、ハイレベルで見るかに直面している。これは基本的な問題である。少数民族を含む民族の帰属意識と国家の帰属意識、さらに少数民族文化を含む中国文化の自主性と文化自覚は、中国にとってこれから長い間避けて通れない重要な課題である。「グローバル化」の背景においては、この問題はもっと複雑な意味合いを持つのであろう。